

報告事項 2

学力・学習状況充実プランについて

このことについて、別紙資料に基づき報告します。

平成27年2月16日

義務教育課

平成 26 年度全国学力・学習状況調査
学力・学習状況充実プラン

愛知県全体の傾向を踏まえた，県としての改善の指針

愛知県全体の傾向

(以上 1 月配付)

平成 2 7 年 2 月

愛知県教育委員会

愛知県学力向上推進委員会

愛知県全体の傾向を踏まえた、県としての改善の指針

各市町村・学校の実態に応じて必要な手立てを講じることで、
教師の授業力を高め、児童生徒の学力向上を図りましょう

授業改善に向けて 改善の指針

自分の力で課題を解決できる
思考力・判断力・表現力等を育てましょう

具体的な方策は、小・中学校版学力・学習状況充実プランや授業アドバイスシート等で掲載

<改善のポイント>

- 児童生徒一人一人の実態を把握し、それぞれに身に付けさせたい力を明確にする。
- 児童生徒が、言語活動を通して、学年に応じた表現力を身に付け、主体的に課題を解決する授業を展開する。
- 児童生徒が、見通しをもって授業に臨み、1時間の授業で身に付けた力を自覚できる振り返りの場を設ける。
- 児童生徒が、身に付けた力を各教科等及び家庭、地域で発揮できる計画を立案する。

校内体制づくり 改善の指針

児童生徒の実態を全職員で把握し
課題解決に向けた
具体的な取組を展開しましょう

<改善のポイント>

- 全国学力・学習状況調査や独自の調査、日ごろの児童生徒の様子から、自校の実態や課題を全教職員で把握する。
- 課題解決の方策と学習内容の系統性や身に付けさせたい力、教材、言語活動、評価の5点を関連させた計画を立案し、学校全体で共通理解して取り組む。
- PDCAによる校内の検証改善サイクルを確立する。
- 必要な課題解決のための教員研修の充実を図る。

地域連携に向けて 改善の指針

学校を中心に家庭・
地域と一体となった
教育を推進しましょう

<改善のポイント>

- 学校、家庭での児童生徒の様子を共有し、基本的な生活習慣、家庭での自学自習や読書習慣を身に付けさせる。
- 地域・家庭を巻き込んだ教育活動を計画する。
- ・地域人材の積極的な活用(支援ボランティア、ゲストティーチャー等)
- ・地域の自然や図書館、博物館等の公共施設及び民間の施設の活用
- 近隣の学校・園との交流(園児・児童・生徒の交流、教師間交流)を促進するとともに、幼(保)・小・中の円滑な接続のための研修等も充実させる。
- 学校の取組を校外に発信(教員による発信、児童生徒の地域活動)し、家庭・地域の声を授業や行事等の充実に役立てる。

勉強の大切さを理解し、できるようになりたいという意識が強い。

全国に比べ、「人の気持ちが分かる人間になりたい」、「きまり(規則)を守ろう」という意識が高い。

基礎的・基本的な指導に力を入れている。

授業研究を伴う校内研修やHPによる情報発信の頻度が全国に比べて多い。

長所

・ 人前で説明したり、文章を書いたりすることに苦手意識をもっている。

・ 自分で課題を見つけて解決する学習や新しい課題に挑戦することに慣れていない。

・ 学習を振り返る活動や発展的な学習、実生活に関連した授業等の実施の割合が低い。

・ 学力調査の結果を活用した全職員での取組が全国に比べて少ない。

課題

全国学力・学習状況調査から明らかになった本県の児童生徒及び学校の主な実態

平成26年度全国学力・学習状況調査 愛知県全体の傾向

1 教科に関する調査の全体傾向

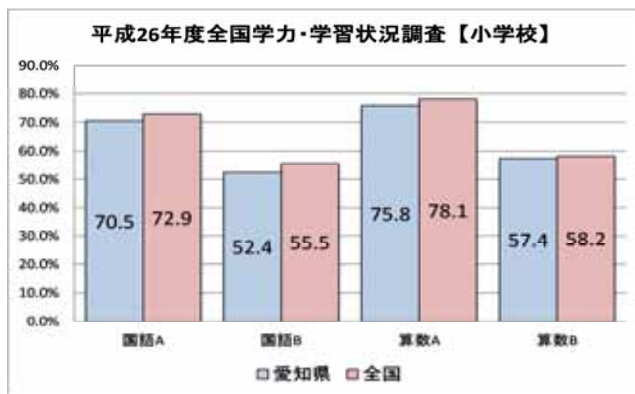
(1) 平成26年度の結果(悉皆調査)

調査区分	平均正答率(%)	
	小学校	中学校
国語A (知識)	県 70.5 国(72.9)	79.2 (79.4)
国語B (活用)	52.4 (55.5)	51.5 (51.0)
算数・数学A (知識)	75.8 (78.1)	69.7 (67.4)
算数・数学B (活用)	57.4 (58.2)	62.5 (59.8)

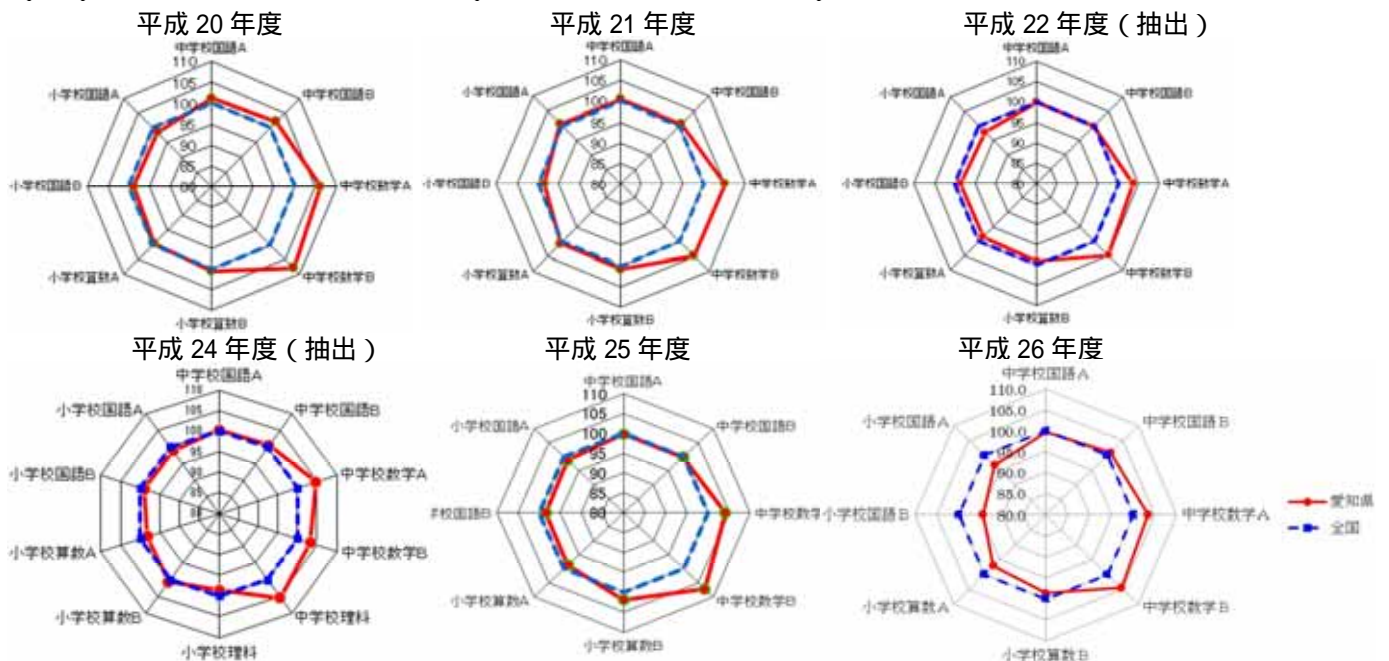
全国学力・学習状況調査は、年ごとに問題数、平均正答率が異なり、単純に平均正答率のみで経年比較することはできない。そこで、本県では、主に全国(公立)との比較で県全体の傾向を分析した。

全国の平均正答率との比較において、小学校では、国語A、B、算数Aが全国より低く、算数Bは全国と同程度である。中学校では、国語は全国と同程度で、数学は全国より高い結果となった。

全国は公立学校の平均正答率



(2) 調査区分ごとに見た傾向(全国を基準とした比較)

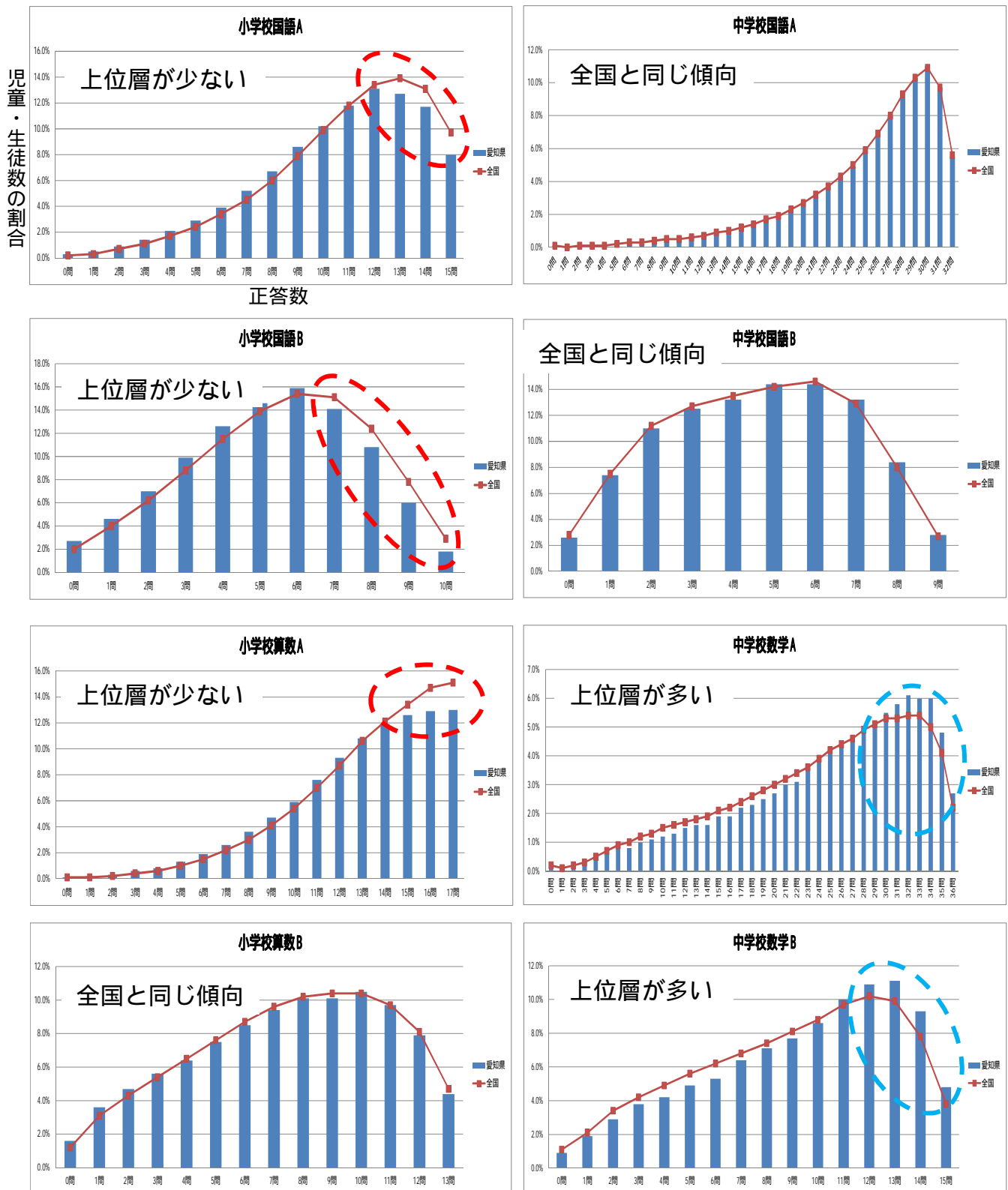


調査開始以来、全国との比較において小学校よりも中学校が高い傾向が続いている。

(3) 調査区分ごとの結果の分布 (正答数別の児童・生徒数の割合)

< 小学校 >

< 中学校 >



小学校国語A, 国語B, 算数Aは, 高い正答数の児童の割合が少ない。上位層の力を伸ばす指導が必要である。

(4) 調査結果から明らかになった特徴

教科	校種	平均正答率から見た特徴 (良い傾向 ・ 課題)	改善の方向性
国語	小学校	<p>「漢字の読み書き」の正答率の平均は、全国との差が小さくなっている。</p> <p>H22 まで-2.3% ~ -2.9% H24 以降-1.5% ~ -1.9%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「立場を明確にした上で、相手の意見を引用し、制限字数内で質問または意見を記述すること」「条件に合わせてまとめを記述すること」「複数の詩や文章を比べて読み、条件に合わせて適切に自分の考えを書くこと」などに課題がある。 ・無解答率が、全国より1%程度高い。 	<p>小・中9年間を通じて、児童生徒の実態に応じて段階的に以下の指導を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校生活全般で、国語で身に付けた力を発揮する場を設定する。 ・「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域を関連させた指導を充実させる。 ・多様なジャンルやテキストの読み方を指導し、目的や意図に応じた効果的な読み方を身に付けさせる。 ・思考し表現する学習において、緩やかな条件から厳しい条件へと系統的・段階的に丁寧な指導を行い、着実に表現力を向上させる。
	中学校	<p>領域別、問題形式別の平均正答率は、全国との差はほとんどなく、B問題では、全国平均を下回る領域や問題形式はなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「読んだり聞いたりした複数の内容からその要旨や要点を捉え、自分の考えをまとめること」「目的に応じて適切に情報を得て考えたことを、示された条件を網羅して根拠を明確にして書くこと」「普段あまり使わない語句や熟語について、語句の意味を理解して文脈に合わせて適切に使ったり、文脈の中で漢字を正しく読み書きしたりすること」に課題がある。 	
算数・数学	小学校	<p>記述式の問題の正答率が過去最高になっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「式と計算」の問題では、第4学年以前に学習した内容についての問題で、全国との差が大きくなる傾向がある。 ・問題に示された事象について、情報を処理し、筋道立てて考察したり、その内容を数式や算数用語を使って適切に表現したりすることに課題がある。 ・「単位量あたりの大きさ」「割合を使った計算」等についての乗法・除法の意味理解に課題がある。 	<p>児童生徒の実態や発達、学年に応じたスパイラルによる指導を展開する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習事項や学習内容の定着度の確認を重視する。(小) ・単元で身に付けさせるべき力を明確にするとともに、児童生徒の実態を踏まえた授業計画を立案する。 ・発展的な問題に挑戦して解決したときの喜びを味わわせる場を設定する。(中) 算数・数学的活動(言語活動)を軸にした課題解決的な学習を充実させる。 ・「言葉や数、式、図を用いて考え、説明する言語活動」や「目的に応じて表やグラフを選び、活用する言語活動」を適切に位置付ける。
	中学校	<p>A, B問題共に、領域・評価の観点別、解答形式別の全てにおいて、平均正答率が全国を上回っている。中でも、全国との比較においては、「数と計算」「資料の活用」が高い。</p> <p>全国に比べ無解答率は低い傾向にある。正答率が60%未満で無解答率が10%を超えた設問が今年の11問から5問に減った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「数学用語や式、図表等で表された事象を基に判断したことについて、適切な用語や方法で説明すること」「数学用語や図、表、グラフ、式で表された事象を基に適切に問題を解決すること」「数学用語を正しく理解し、言葉や文章、図、表、グラフ、式を関連付けて読んだり、考察したりすること」に課題がある。 	

2 質問紙調査の全体傾向

(1) 児童生徒質問紙より

	主な傾向	改善の方向性
学習に関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国語や算数の重要性や有用性を感じている児童・生徒が多いが、「教科の勉強が好きか」の質問に対しては、肯定的な回答の割合が他の項目に比べて低い。 ・ 話し合いにおいて、友達の話や意見を最後まで聞くようにしている児童生徒が多い。 ・ 書いたり、話したりすることに苦手意識をもつ児童生徒の割合が多く、中学生になるとその傾向がより顕著になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「分かった」、「できた」と実感できる授業を展開し、国語好き、算数・数学好きの児童生徒を増やしていきたい。 ・ コミュニケーション活動の楽しさを味わわせる指導が望まれる。 ・ 学校全体で、表現することに慣れさせる取組が望まれる。
道徳性 規範意識等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「人の役に立つ人間になりたい」、「人の気持ちが分かる人間になりたい」と回答した児童生徒の割合は高く、「規則やきまりを守る」児童生徒の割合も高い。 ・ 人前で行動したり発言したりすることに苦手意識をもっている児童・生徒が多い。 ・ 「学校は楽しい」と回答した児童生徒は、小・中共に85%前後であった。しかし、15%前後の児童生徒が「楽しくない」と感じている。 ・ 「自分には良いところがある」と回答した小学生は76%、中学生は68%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道徳に関する項目について、肯定的な回答をしていない児童生徒に焦点を当てた指導にも心がける。 ・ 保護者の教育への関心の高さを生かし、家庭と学校、地域が一体となって子どもを育てる環境づくりが望まれる。 ・ 児童生徒一人一人とのコミュニケーションを十分にとる必要がある。
生活環境 習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・ 朝ご飯を毎日食べる児童生徒、家庭学習で宿題をする児童生徒が多い。反面、自分で計画を立てて家庭学習を行う児童生徒が少ない。 ・ ゲーム等をする時間が長くなる傾向が見られ、決まった時刻に就寝している児童生徒が全国より少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒が進んで学習できるよう授業改善を行い、授業で育んだ学ぶ意欲を家庭学習につなげるよう教師間及び家庭との共通理解を図っていきたい。

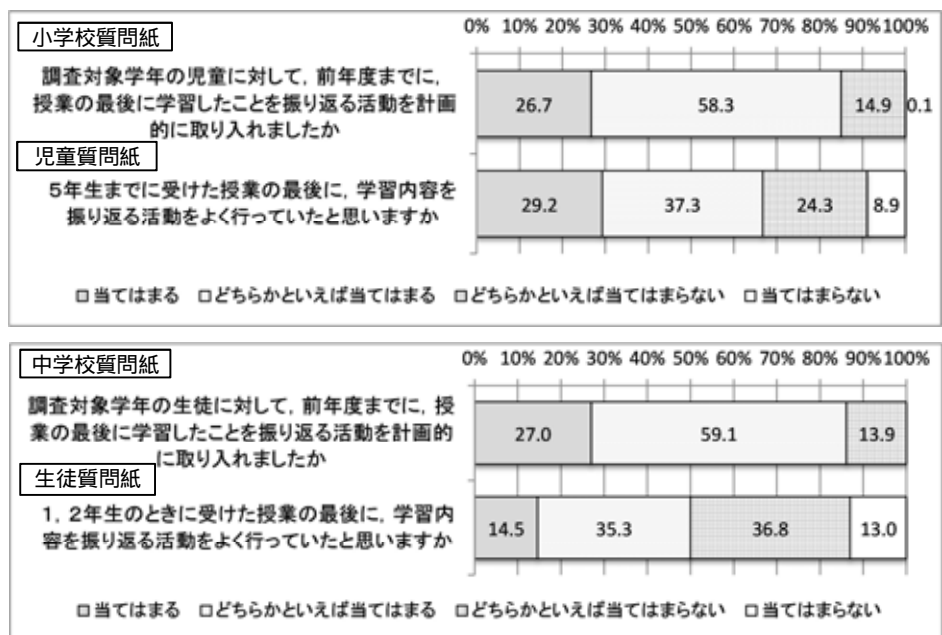
(2) 学校質問紙より

	主な傾向	改善の方向性
教科指導	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本県では、漢字の読み書きや計算を重視した指導が多く、国語の指導では、書く指導も多くなっている。 ・ 学校質問紙と児童生徒質問紙の回答の状況に差がある項目（「授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れたか」、「学級やグループで話し合う活動を授業で行ったか」など）がある。 ・ 発展的な学習、実生活との関連を図った授業を実施する割合が低い。 ・ 少人数指導については、小・中学校共に算数・数学においてティームティーチング（TT）を実施している学校の割合が全国より高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既習内容の定着の度合いを捉えた指導の工夫が必要である。 ・ 児童生徒に分かる指導の工夫を行う。 ・ 振り返り（メタ認知）を通じてできるようになったことを自覚させ、自分や友達の考えを見直し新しい考えをつくり出す指導が必要である。 ・ 学習内容や児童生徒の状況に応じた、授業形態の工夫が必要である。
学力向上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「授業の冒頭で目標を示す活動」、「学習したことを振り返る活動」が増えてきたが、全国との比較においてははまだ差がある。また、学校がやっていると思っっているほど児童生徒はそう感じていない状況もある。 ・ 「様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をした」、「発言や活動の時間を確保して授業を行った」と回答した学校が9割を超えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校全体で、身に付けさせたい力や教材、言語活動、評価、系統性の5点を関連付けた計画を立案する。 ・ 振り返り活動の4つのポイント（授業アドバイスシート小学校国語 参照）を取り入れた指導

<p>学 力 向 上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「本やインターネットなどを使った資料の調べ方」の指導をよく行っている学校の割合が全国より低く、小・中学校で比較すると中学校が少ない状況である。 ・小学校に比べ、家庭学習の与え方について、校内の教職員の共通理解を図って課題を与える中学校が多い。 ・保護者に対して家庭学習を促す働きかけをしている学校の割合が全国に比べ低い。 	<p>を行いたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導の意図が児童生徒に伝わるような工夫が必要である。 ・小学校においても、学年、学校単位で家庭学習の内容や与え方について共通理解を図る場を設定したい。
<p>学 校 経 営</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の教育目標やその達成に向けた方向についての共通理解は、各校で進められている。 ・学校支援ボランティア活動の効果を感じている学校が多い中、ボランティア等による授業サポートの実施はなかなか進んでいない。 ・近隣の小・中学校間で、教科の指導内容や指導方法等を合同で研修したり、教育課程の接続を図ったりする取組を行っているとした学校が、全国に比べ少ない。 ・これまで同様、各小学校における授業研究を伴う校内研修を行う回数は、全国に比べ多い。 ・「学校全体の学力の傾向や課題について全教職員で共有する」、「講師を招聘するなどの校内研修を行う」学校の割合が全国に比べ、低くなっている。 ・以前に比べ増えてきたが、全国学力・学習状況調査や学校独自に行う調査結果が全国に比べ活用されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や保護者に学校の取組について理解してもらえよう、学級通信やHPによる情報提供やボランティア等の仕組みづくりに努める。 ・9年間を見通した指導体制を中学校区ごとに確立し、接続における問題を解消する。 ・次の学習指導要領の改訂も見通し、今求められている学力や授業の在り方について全教職員が知る機会を設けたり、校外の有識者等の評価を受けたりしながら、各校の取組をより確かなものとする。

(3) 学校質問紙と児童生徒質問紙との比較より

学校質問紙と児童生徒質問紙の関連した質問項目の結果を比較することで、児童生徒をより深く捉えることができる。例えば、小学校・中学校版学力・学習状況充実プランで課題解決の方策に挙げた「振り返り(メタ認知)活動」については、小・中学校とも県内の約85%が肯定的な回答をしているが、児童生徒との差は、小学校で約19ポイント、中学校で約36ポイントの差が見られる。授業の終わりのまとめを行っているのに、これだけの児童生徒が1時間で何を学んだかはっきりせずに授業を終えている可能性がある。成果を上げている都道府県は、児童生徒質問紙の結果が学校質問紙の結果に近づいてくる傾向がある。このことから、学力向上には、教師の意図が児童生徒に確実に伝わるのが欠かせない。

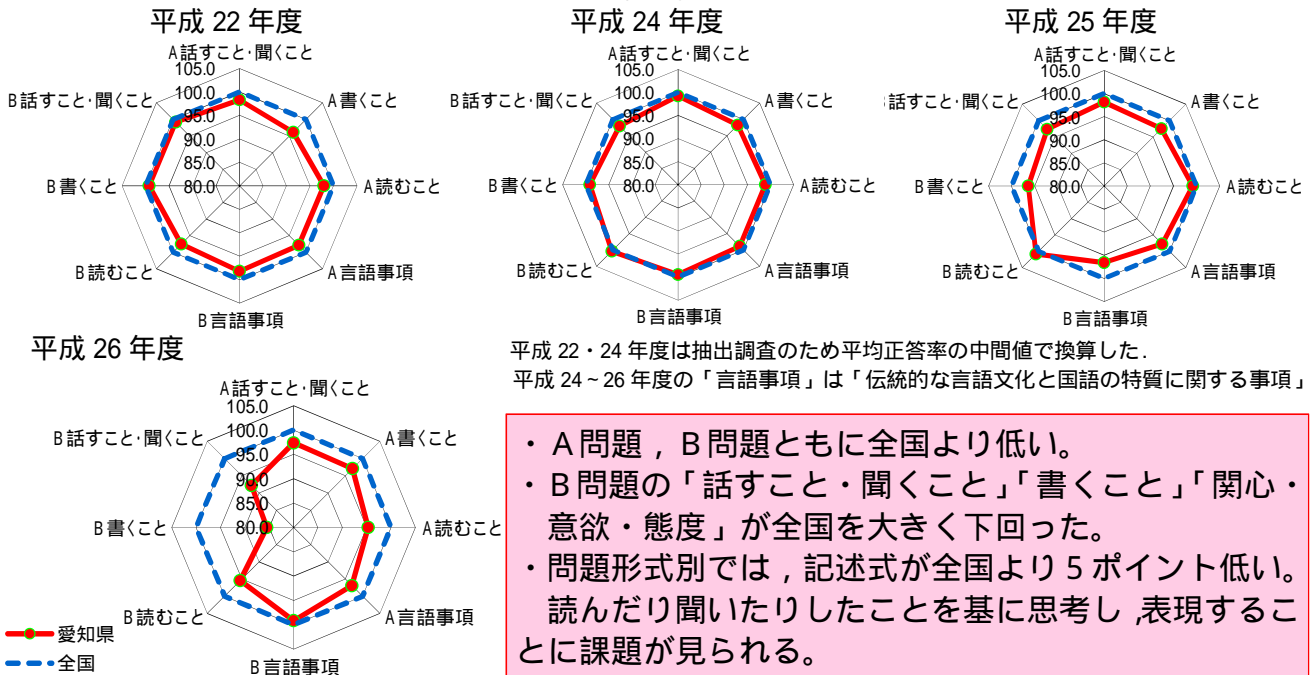


3 国語の傾向

(1) 小学校国語の傾向 平均正答率 A問題:県 70.5%(国 72.9%) B問題:県 52.4%(国 55.5%)

ア 領域・評価観点・解答形式別で見た傾向

< 全国を基準(100)とした比較 >



平成 22・24 年度は抽出調査のため平均正答率の中間値で換算した。
平成 24～26 年度の「言語事項」は「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」

- ・ A 問題, B 問題ともに全国より低い。
- ・ B 問題の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「関心・意欲・態度」が全国を大きく下回った。
- ・ 問題形式別では, 記述式が全国より 5 ポイント低い。読んだり聞いたりしたことを基に思考し, 表現することに課題が見られる。

< 領域等・評価の観点・問題形式ごとの全国の平均正答率との差 > (%)

年度・調査区分		平成 22 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度	
		A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用
教科全体						-1.5	-0.8	-2.4	-3.1
領域等	話すこと・聞くこと	-1.4	-0.6	-0.6	-1.3	-0.8	-1.7	-1.9	-4.0
	書くこと	-2.6	-0.7	-1.0	-0.4	-1.3	-1.6	-2.1	-5.0
	読むこと	-1.5	-1.8	-0.9	0.2	-0.5	0.4	-3.2	-2.6
	言語事項	-1.8	-1.3	-1.0	-0.3	-1.4	-2.2	-2.3	-0.6
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	-1.6	-1.3	-1.4	0.2	-1.3	-1.2		-5.0
	話す・聞く能力	-1.4	-0.6	-0.6	-1.3	-0.8	-1.7	-1.9	-4.0
	書く能力	-2.6	-0.7	-1.0	-0.4	-1.3	-1.6	-2.1	-5.0
	読む能力	-1.5	-1.8	-0.9	0.2	-0.5	0.4	-3.2	-2.6
	言語についての知識・理解・技能	-1.8	-1.3	-1.0	-0.3	-1.4	-2.2	-2.3	-0.6
問題形式	選択式	-1.8	-0.8	-0.6	-1.0	-0.9	-1.0	-2.6	-2.0
	短答式	-1.9	-0.7	-1.0	0.5	-1.8	-0.5	-2.3	-2.5
	記述式		-1.6		0.2	-1.3	-1.2		-5.0

イ 無解答率から見た傾向 (正答率が 60% 未満で, 無解答率が 10% 以上の設問) (%)

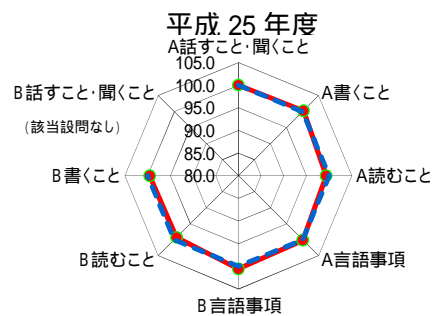
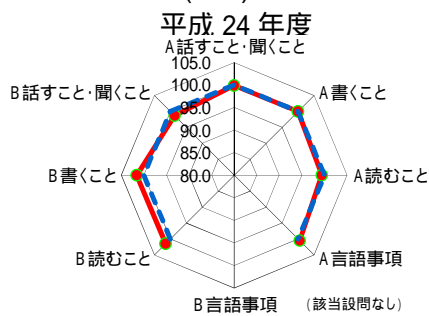
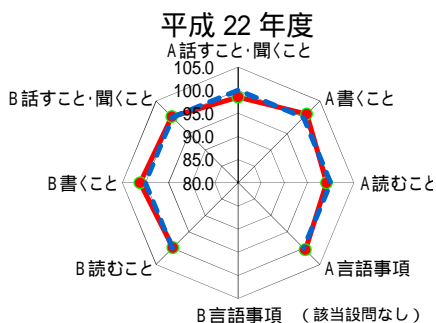
設問番号	観点	形式	正答率	無解答率	設問番号	観点	形式	正答率	無解答率
A 1 二(2)		短答	56.2	10.6	B 3 三		記述	43.6	27.6
B 3 二		選択	45.8	22.5					

A, B 合わせて 25 問の問題全ての無解答率が, 全国を上回った。無解答率の平均値は A 問題 3.2% (全国 +0.9), B 問題 10.5% (全国 +1.3) であった。平均正答率が昨年度調査より高いことで, 正答率が 60% 未満で無解答率が 10% 以上の設問数は減ったが, 選択式の B 3 二でも無解答率が 22.5% (全国 +2.7) であった。

(2) 中学校国語の傾向 平均正答率 A問題:県 79.2%(国 79.4%) B問題:県 51.5%(国 51.0%)

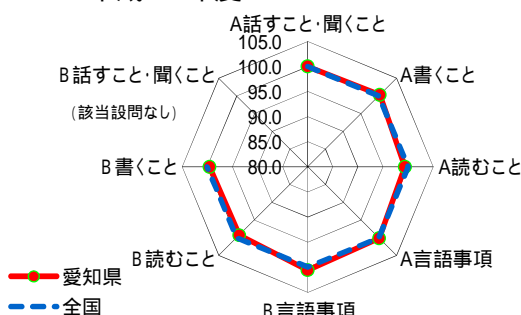
ア 領域・評価観点・解答形式別で見た傾向

< 全国を基準(100)とした比較 >



平成 22・24 年度は抽出調査のため平均正答率の中間値で換算した。
平成 24・25 年度の「言語事項」は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」

平成 26 年度



・過去3年と同様に、全国と同程度の結果であった。
・領域、評価の観点、問題形式別に見ると、A問題は全て全国を下回り、B問題は全て上回った。A問題の「読むこと」は、平成21年度以降全国を下回る状況が続いている。平均正答率は、全国同様、「書くこと」「記述式」の問題が低い。
目的に応じて、複数の資料や文章、会話の内容などから必要な情報を捉え、考えたことを示された条件を網羅して根拠を明確にして書くことに課題がある。

< 領域等・評価の観点・問題形式ごとの全国平均正答率との差 > (%)

全国の平均正答率との差 (%)		平成 22 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度	
		A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用	A 知識	B 活用
教科全体の平均正答率						-0.1	-0.3	-0.2	0.5
領域等	話すこと・聞くこと	-1.1	0.1	-0.1	-0.8	0.0		-0.5	
	書くこと	0.7	0.7	0.0	0.9	0.2	-0.3	-0.1	0.3
	読むこと	-0.7	-0.1	-0.4	0.9	-0.5	-0.5	-0.9	0.1
	言語事項	0.4		0.4		0.1	0.4	-0.1	0.7
評価の観点	国語への関心・意欲・態度		0.7		0.9		-0.3		0.3
	話す・聞く能力	-1.1	0.1	-0.1	-0.8	0.0		-0.5	
	書く能力	0.7	0.7	0.0	0.9	0.2	-0.3	-0.1	0.3
	読む能力	-0.7	-0.1	-0.4	0.9	-0.5	-0.5	-0.9	0.1
	言語についての知識・理解・技能	0.4		0.4		0.1	0.4	-0.1	0.7
問題形式	選択式	-0.3	-0.6	0.2	-0.2	-0.3	-0.5	-0.2	0.6
	短答式	0.4	-0.1	0.1	1.0	0.4	0.5	-0.2	
	記述式		0.7		0.9		-0.3		0.3

イ 無解答率から見た傾向 (平均正答率が60%未満で、無解答率が10%以上の設問) (%)

設問番号	観点	形式	平均正答率	無解答率	設問番号	観点	形式	平均正答率	無解答率
A 8-1		短答	55.3	12.4	B 2三		記述	29.5	15.9

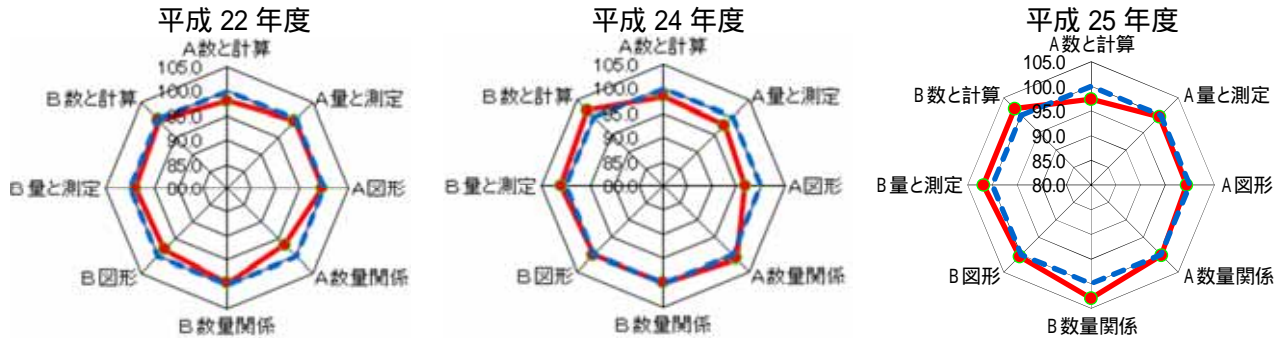
無解答率の平均値はA問題 3.0% (全国-0.1), B問題 3.3% (全国-0.2) であった。B問題の平均正答率が昨年度調査より 15%程度低い状況でも、無解答率は低く、粘り強く問題を解こうとしている。平均正答率が60%未満で無解答率が10%以上の設問数も昨年と同じ2問であった。

4 算数・数学の傾向

(1) 小学校算数の傾向 平均正答率 A問題:県 75.8%(国 78.1%) B問題:県 57.4%(国 58.2%)

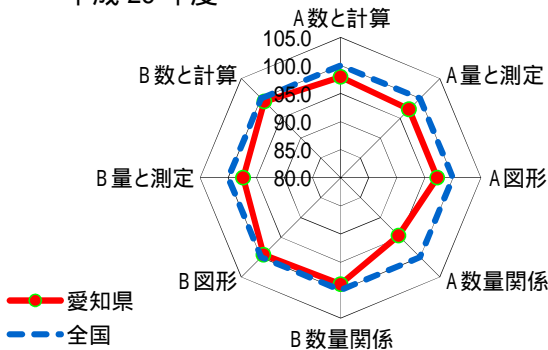
ア 領域・評価観点・解答形式別で見た傾向

< 全国を基準(100)とした比較 >



平成 26 年度

平成 22・24 年度は平均正答率の中間値で換算した。



- ・ A問題は、平成 22 年度以降全国よりやや低く、「図形」は調査開始以来 7 回連続全国を下回っている。B問題は、平成 22 年度以来 3 回ぶりに全国を下回った。
- ・ 全国との差が最も大きかった「四則が混合した計算」では、平成 21 年度の内容の問題と比較すると、全国が 14 ポイント、本県は 8 ポイント上昇した。児童の実態に応じて、県全体で課題の改善に向けて取り組む必要がある。

< 領域等・評価の観点・問題形式ごとの全国平均正答率との差 >

(%)

全国の平均正答率との差(%)		平成 2 2 年度		平成 2 4 年度		平成 2 5 年度		平成 2 6 年度	
		A知識	B活用	A知識	B活用	A知識	B活用	A知識	B活用
教科全体の正答率						-1.0	1.1	-2.3	-0.8
領域	数と計算	-1.5	-0.1	-1.2	1.0	-2.1	0.9	-1.7	-0.5
	量と測定	-0.3	-0.4	-1.6	0.6	-0.3	1.0	-2.1	-1.5
	図形	-0.4	-0.8	-2.4	0.2	-0.5	0.4	-2.0	-0.4
	数量関係	-2.1	-0.2	0.9	-0.1	0.1	1.6	-4.4	-0.6
評価観点	数学的な考え方		-0.5		0.6		1.3		-0.9
	数量や図形についての表現・処理	-1.0	-1.0	-1.1	0.7	-2.7	0.5	-2.3	-0.1
	数量や図形についての知識・理解	-1.1	0.3	-1.4	-0.8	0.3	0.8	-2.4	-1.6
問題形式	選択式	-0.5	0.0	-1.8	-0.4	0.8	0.8	-2.3	-1.3
	短答式	-1.4	0.0	-1.1	0.6	-2.2	1.3	-2.3	0.0
	記述式		-1.1		0.7		1.1		-1.1

イ 無解答率から見た傾向 (平均正答率が 60%未満で、無解答率が 10%以上の設問) (%)

設問番号	領域	形式	正答率	無解答率	設問番号	領域	形式	正答率	無解答率
B 4 (2)		記述	56.9	14.3	B 5 (3)		記述	32.7	13.2

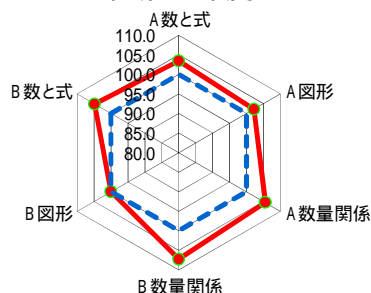
A, B 合わせて 30 問中 29 問 (25 年度調査は, 32 問中 26 問) が, 全国は無解答率を上回った。無解答率の平均値は A 問題 1.4% (全国 +0.5), B 問題 5.1% (全国 +0.8) であった。平均正答率が 60%未満で無解答率が 10%以上の設問数は 2 問(昨年 3 問)で、いずれも「数と計算」に関する記述式の問題であった。

(2) 中学校数学の傾向 平均正答率 A問題:県 69.7%(国 67.4%) B問題:県 62.5%(国 59.8%)

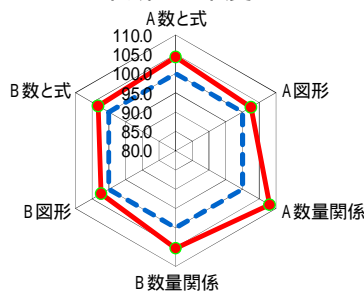
ア 領域・評価観点・解答形式別で見た傾向

< 全国を基準(100)とした比較 > 平成22・24年度は平均正答率の中間値で換算した。

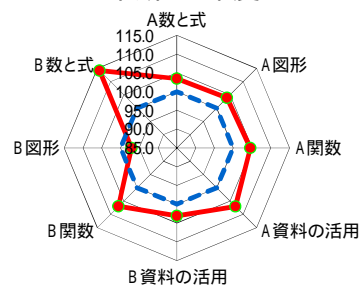
平成22年度



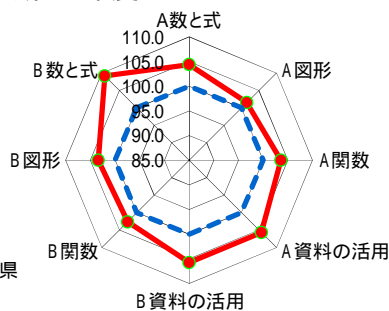
平成24年度



平成25年度



平成26年度



● 愛知県
--- 全国

- ・ A問題, B問題ともに全国より高い。正答率が全国を下回ったのは, A, B問題合わせて51問中4問(H24, 25は6問)であった。4問中3問は「図形」に関する設問であった。
- ・ A問題, B問題ともに, 領域別, 評価の観点別, 問題形式別, 全てで全国を上回っているが, 例年に比べ「知識・理解」が全国平均に近い。

< 領域・評価の観点・問題形式ごとの全国の平均正答率との差 > (%)

全国の平均正答率との差(%)		平成22年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度	
		A知識	B活用	A知識	B活用	A知識	B活用	A知識	B活用
教科全体の平均正答率						2.6	3.0	2.3	2.7
領域	数と式	2.6	2.1	2.9	1.3	2.5	5.9	3.4	5.2
	図形	1.4	0.0	1.7	1.4	2.5	-1.3	1.0	2.0
	関数	3.0	3.3	4.2	2.1	2.7	2.8	2.1	1.7
	資料の活用					3.3	1.3	3.4	3.2
評価の観点	数学的な見方や考え方		2.0		1.6		2.4		2.8
	数学的な技能	2.7	3.4	3.8	2.1	2.9	6.5	3.4	
	数量や図形などについての知識・理解	2.1		2.4	0.2	2.4	2.9	1.5	0.8
問題形式	選択式	2.0	3.1	2.2	0.6	2.2	2.0	1.6	0.7
	短答式	2.7	1.9	4.0	1.7	3.1	4.7	3.0	3.6
	記述式		1.9		2.0		2.3		2.6

イ 無解答率から見た傾向(正答率が60%未満で, 無解答率が10%以上の設問)(%)

番号	領域	形式	正答率	無解答率	番号	領域	形式	正答率	無解答率
A 9		短答	37.4	16.5	B 4 (2)		短答	29.0	21.9
A 13 (1)		短答	42.1	16.7	B 6 (3)		記述	32.1	17.4
B 4 (1)		記述	39.0	24.3					

数字は学習指導要領の領域を示す。

無解答率の平均値はA問題 3.6% (全国-0.7), B問題 10.1% (全国-0.8)であった。全国に比べ無解答率は低く, 粘り強く問題を解こうとしている。平均正答率が60%未満で無解答率が10%以上の設問5問には, 「図形」と「関数」の設問が2問ずつあった。